

第 5 回「会員交流会」を開催



第 5 回会員交流会は、平成 26 年 7 月 31 日、東京で、協賛団体である東京書籍株式会社様の本社会議室をお借りして開催いたしました。

会員 7 名と、理事長の梶田、常務理事の井上、理事の柳澤、山口も参加して、和やかな雰囲気ではじめられ、会員の皆様からも大変有意義なお話を伺うことができました。

会員交流会は楽しいです

私は、こどもの頃から日本語ファンです。日本語検定受検をきっかけに、日本語検定委員会の正会員になりました。これは、特に資格審査はありませんから、入会金と会費を払えばだれでもなれます。正会員は、会員特典もありますが、より基本的には、委員会の最高機関である総会を構成するメンバーになり、総会を通じて、決算承認をはじめ委員会運営に関する重要事項を決定する立場であると言えます。この立場は重責ですが、実際に総会で審査してみると、委員会の運営は誠実かつ堅実でした。そうすると今度は、正会員が委員会の運営審査のためだけに集まる状況はもったいないと感じました。東京で開催される総会に出席できない正会員は、他の正会員と知り合う機会もないわけであり、この点も残念です。そこで私は総会で、正会員が日本語ファンとして自由に語り合える場を設けることを提案しました。委員会からさっそくご了解をいただき、新たに会員交流会が設定されて、正会員が 3 名集まる見込みが立てばどの地域でも開催してもらえる組み立てになりました。正会員とは、この委員会が進む方向まで提案できて相当な確度で実現してもらえる、大きな立場だと感じます。

会員交流会は、東京で今年まで 3 年続けて開催されており、私はすべて出席しています。出席なさる正会員には、私と同様な日本語ファンである方も、校正や教育の立場で業務として日本語に日々向き合っている方もいます。また毎回、理事長はじめ、理事の方々も多数出席なさっており、その結果、長年日本語を研究している方や日本語検定を作成している方もこの場に一堂に会します。これまでのところ、1 回の参加者は 10 数名程度であり、90 分にわたってフリートーキングしています。会合の初めにメンバーが最近気にしていることをそれぞれ発言しますが、話題が広く、それだけでとても刺激を受けます。

3 年間の主な話題を振り返ります。こどもに生きる力をつけるために教育現場で古典をじっくり鑑賞させたいという要請がある一方で、多文化共生などの見地からコミュニケーションにおいてより平易な表現を心がけるべきだという要請もあります。このため、これからの日本語に関するイメージを共有すること自体、容易ではありません。また、音声、方言に関することや、マスコミで使われがちな表現に偏りを感じる、とか、警察官から職務質問を受けて気持ちがすくんだ、といった話題はとても新鮮です。ところで、今年2月に文化審議会国語分科会が出した『「異字同訓」の漢字の使い分け例(報告)』は、いくつかの項目で補足説明を加えていますが、その根拠を示していません。私はこの点が気になり、今年の会合で、こうした補足説明は果たして引用に値する情報なのか不安を感じる旨発言しました。すると、日本の国語政策には日本語のあり方について常設審議体制になっていない弱みがあるという指摘があり、なるほどと思いました。

みなさん、会員交流会で硬軟取り混ぜたフリートーキングをしませんか。



正会員・吉田敏治